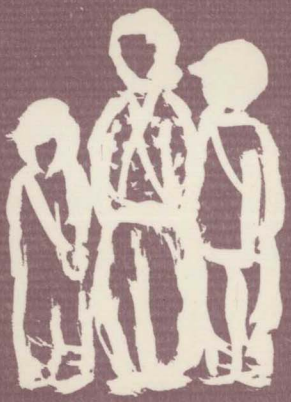
あしたあしたあしたへ



兄貴

今江祥智＝作
長新太＝絵

理論社

今江祥智　京都市北区上賀茂南大路町52

1932年大阪市に生まれる。同志社大学英文科卒業。名古屋で中学教員，東京で編集者暮しののち，京都に帰り，現在聖母女学院短大で児童文学を講ず。著書に『山のむこうは青い海だった』『ぽけっとにいっぱい』『あのこ』『ぽんぽん』（理論社），『ばるちざん』（大和書房），『絵本の時間絵本の部屋』（すばる書房），『人間なんて知らないよ』（筑摩書房）など。

作者　今江祥智（いまえ・よしとも）　NDC913 A5変型 20cm 238p

画家　長　新太（ちょう・しんた）　1976年初版 8393—31507—8924

兄　貴　1977年5月第七刷発行©

制作　小宮山量平　発行　山村光司　発行所　株式会社　理論社

住所　東京都新宿区若松町104番地　電話03（203）5791　振替口座東京9-95736

兄　貴＝もくじ

第一部　かあさんのいくさが始まる……

第一章　いちばん長い遠足　6

第二章　田舎(いなか)における戦争(いくさ)のしるし　23

第三章　それぞれの四月　40

第四章　土にかえる　56

第五章　思い出袋がゆっくりまわる……　72

第六章　赤襌(ふんどし)をめぐるある事件　88

第七章　かあさんが、たんかをきった……　104

1975年1月より11月まで
雑誌『すてきなお母さん』に連載

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二部 兄貴

第一章 日本上陸はあるか……122
第二章 ある決闘 135
第三章 やせっぽちの女の子がやってきた……155
第四章 「大」空襲が追いかけてきた日 175
第五章 新型爆弾と八月十日 188
第六章 ある晴れた日に……201
最終章 しかし、お祭りは続く……214
あとがき 236

さしえ＝長 新太

表紙および
カバーの文字 今江冬子

はじめに――

四年前、三年がかりで二人の少年の物語を書き、一冊にまとめました。長篇少年小説『ぼんぼん』です。小松洋次郎、洋(ひろし)の兄弟があのいくさの日々を生きた物語で、ときは昭和十六年五月から二十年三月十四日の大阪大空襲にわたり、そのあいだに、父の死、祖母の死、もう一人の兄の死があり、いくさのふくれあがりがあり、洋の女ともだちとの出会いがあります。エピローグは、京は祇園祭の復活第一回の昭和二十二年夏になっていますが、こんどの『兄貴』では、大空襲のあとからその夏までの母子三人の生きざまを描こうという寸法です。同じ登場人物たちが出没する続篇の体裁もとっていますが、むろん、こちらだけ独立しても読めるものであります。

作者

第一部 かあさんのいくさが始まる……

第一章
いちばん長い遠足

1

列車は、時刻表などないみたいに、のそのそと走り、勝手に止り、小さな駅にでもたどりつけば、おおいばりでいつまでも停車していた。それでも車内の人は、だれも不平をこぼさなかった。いや、不平どころか、「ことば」そのものを、ひときれも口からこぼさなかった……。

奇妙な静けさのなかで、洋次郎も洋(ひろし)も、疲れすぎてぼんやりしていた。窓の外には春のいろがひろがっていて、そいつを眺めていれば、少しは気も休まるだろうに、ふたりとも、景色を眺めるといった気もちのゆとりがないのだった……。

洋は、前の席に坐っている男がひろげる新聞を、長いこと見ていた。相手もあきもせずに、同じ面(ページ)だけ読んでいるのだったが、べつに、いつ裏返しにされてもかまわなかった。記事を読んでいるのではなかったからだ。洋はいつまでも同じところを——昭和二十年三月三十一日という、発行の日付けを見ているだけだった。

あの日から、もうずいぶんと日がすぎたように思っていたのに、まだ三月なンかなあ……という気もちだったのだ。

紙面には、けっこうおそろしい活字がおどっていた。沖縄本島に敵船団近接、艦砲射撃、逐日激化——という大見出しは、いよいよ本土決戦が近づいたという予告だった。その大見出しのすぐ下には、英の主力艦も参加——とあったから、このぶんでいくと、本土には、「米鬼英鬼」という二種類の鬼が、眼の青い、髪の毛が金色の大鬼どもが、わらわらと上陸してくるというわけらしかった。

けれど、少し前まで——あの日まで、あれほど熱心に新聞で戦況を知りたがり、いちいち心配したり喜んだりしていた兄弟だったのに、ふたりとも、目の前のそのおそろしい戦況を報じた新聞記事には、まるで目がいかないのだ。洋は日付け、洋次郎はぼんやりと、下のすみっこの『螢雪時代』の広告を眺めていた。授業停止がつづいて、学校は開店休業なのに、まだ受験雑誌が発行されていることがふしぎだった。おかしかった。よういわんわ……という気もちさえした。

——……すだァ、すだァ、すだァ……。

列車が駅にすべりこみ、のんびりした声が駅名を連呼した。駅名を聞いても、どのあたりなのか、てんで見当もつかない兄弟は、その声を気にもとめなかったし、乗客もまただれひとりとしてその声を気にしたふうはなかった。小さな駅なんやなあ……と洋は思った。いったい、もういくつくらいこうした駅をすぎていけば、目的地につくのンやろ……。かあさんにたずねたかったが、かあさんはずっと、信玄袋をかかえこむようにして寝入っていた。かあさんかて疲れきってる。ちょっとでも休ませたげんと……という想いが、洋に声をかけるのをためらわせていた。列車はあいかわらず、駅についたことに

安心したように動かない。すると、眠っているとばかり思っていたかあさんの唇が動いた。

——もうすぐだすなあ……。

半分は自分にいいきかせるように、しみじみした調子でいったのに、ふたりとも驚いた。なんや、眠っとらへンかったンか、ほなら、きいたのに……という目に洋がなった。けれどかあさんは、そんな洋のことさえ忘れたみたいに窓のむこうに目をやった。汚れきった窓ガラスなので、景色はにごってよく見えない。かあさんは前の人にことわると、窓をあげた。明るくはなやかな春のいろが、いきなり三人の目を洗った。菜の花のあざやかなレモンイエロー、桃のほんのりしたピンク、桜のやわらかな薄桃いろが、窓の外にまじりあってふうわりとひろがっていた。

——みんないっぺんに咲いてはンのやなあ。

こんな風景は初めての洋が、思わず声をあげると、いままで黙りづめだった前の男が、初めて新聞から顔をあげて、

——ここらは暖いからやして……。

と、教えてくれた。

——もう春がきとったんやなあ……。

洋次郎も眼鏡の奥で目を細めてつぶやいた。

——春も盛りやして……。

前の男がまたしゃべってくれた。新聞を二つ折りにして兄弟の方に向きなおってくれたので、見ると、もうかなりのおとしの、一見してわかるお百姓さんだった。顔と同じ渋紙色に日焼けした大きく剛くごつごつした手が新聞をていねいに折りたたむと、かあさんをふりむいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

——都市の人かいし……。

かあさんは黙ってうなずいた。

着たきり雀のもんぺ姿だったし、それもあの日以来ずいぶんと汚れていたが、このあたりのお百姓のおばさんの着ているもんぺとは生地がちがっていた。兄弟の方も、どこにでもある学生服にゲートル姿だったが、顔の色がちがっていた。

——焼けだされかいし。

お百姓さんは、低声でまたきいた。たぶん、三人の荷物から判断したのだろう。それからお百姓さんは、長いことかあさんを見ていた。ぶしつけにすぎるほど長いこと見ているので、おこりっぽい洋次郎はもう少しで、ええかげんにしてんか、おっちゃん……と声をかけようとしたほどだった。その寸前に、お百姓さんが、またたずねた。

——あんた、もしかしたら市脇の谷さんとこのおとしさんやないんかいし……。

いいえ……と、かあさんは、また無言で頭を横にふった。そらどうも……とか何とかつぶやいて

お百姓さんは口をつぐみ、それきりまた黙りこんでしまった。汽車がごっとり動きだし、今までにないスピードをだしはじめた。窓の外の春のいろが、何本もの色あざやかな帯になって後へ流れはじめる。これやったら、すぐつくわ……という顔で、かあさんは下り支度にかかった。ただ一つの大荷物である小さな仏壇を、洋次郎が網棚からおろすのを（風呂敷が小さくて、端を紐でつないだものだったから、中味がよく見えた）、まわりの人たちがけげんそうに見るなかを、三人は出口にむかって歩きだした。

*

――はっしもとォ、はっしもとォ……。

列車は、ホームの駅員が威勢よく駅名を告げるなかを、まるで終着駅にでもついたように、ゆっくりすべりこんだ。

ホームにおりたって二、三歩いかないうちに、かあさんの目に涙があふれた。人前で泣き顔を見せたのは、とうさんが死んだとき以来のことだった。仏壇入り風呂敷を左肩にかついで、先を歩いていた洋次郎は、ついてこないふたりの気配にふりかえり、かあさんの様子を見てぎくりとした。洋も横からそんなかあさんを見つめて、立ちすくんでいた――。

あの日の大阪大空襲で何もかも――いれものである家から、中味の一切、そこにこめられた半生と思い出の一切をきれいさっぱり焼き払われ、身も心も裸にされた想いでたどりついた故郷の町だった。かあさんの目の奥には、まだあの夜の炎の幕がどこまでも重く垂れさがっていた。一夜のうちに老婆の顔になったような大阪の街の光景が焼きついていた。半月のあいだ、追われるように間借り暮しをつづけ、移り変るなかで、ようやくの思いでここまでたどりつけたのだったが――ここは何もかもが、前のままにあった。駅の階段のすりへりぐあいまで昔のままなら、陸橋横の便所の臭いも昔のまま、改札の駅員

が入る木枠もそのままに残っていた。どこもかしこも、いくさから忘れられたまま、ひっそりとありつづけていたような気がした……。

三十年前、この町から大阪に出て暮し、結婚し母親になり、夫を亡くし、ふくれあがるいくさのなかで生きてきたかあさんにとって、この町は、お墓参りにだけ帰ってくるところだった。本拠（ホーム）は大阪になっていた。ことばもしきたりも顔つきまで、いつのまにやら大阪の人間のものになっていた。それが一夜のことで、何もかもかわってしまった。大阪での三十年が、三十年のなかにこめられた一切が、ビスケットみたいにかんたんに焼かれ、かわってしまった。三十年という長い長いはずの時間が一夜でシュワンと消されてしまった。そしてここへたどりついてみると、この駅は、この町は、その三十年間がまるでなかったみたいに、どこもかわらずに、存在していた。あのいくさえなかったような顔で、ちゃんと存在していた。かあさんは奇妙な時間の渦にまきこまれ、めくるめく「時」の重さに一瞬、気を失ったようなものだった。そしてそれが目いっぱいにあふれる涙になったのだった……。

*

もんぺの袖で涙をおさえ、むりに笑うと、かあさんは洋をうながした。

――アメリカはんも、さすがこの町までよう焼けへンかったやない。よろしおましたなあ。

かあさんは子どもの声にかえっていい、三十年前の、娘だったころの自分の足どりにもどって改札口を通りぬけた。すると、ふしぎな「時」の扉をくぐりぬけたみたいに、三人の目の前に何もかもがかわらぬままの世界がのんびりとひろがっていた。

2

駅前の坂道は白っぽくほこりっぽかった。春の小さなつむじ風が、足もとの砂利をまきあげるので、ときおり目をつむらなければならなかったが、目をあげると、坂道の真正面に、紀ノ川のむこう側の山脈が、おっとりのんびりひろがっていて、そのみどりが目にしみいった。駅前だといっても、人通りもまばらで、もんぺ姿といっても、それが本来の仕事着であるお百姓さんが、ときたま横切るだけのものだった。仏壇入りの風呂敷を肩に、戦闘帽にゲートル姿の洋次郎、わずかな米のはいった袋をしっかりもった同じかっこうの洋、それに信玄袋をにぎりしめたもんぺ姿のかあさんという、母子三人組の緊張しきった顔は（それでも三人は、あの日以来、初めて顔の緊張を解いたつもりでいた……）、そんな町や風景に似合わなかった。いくさを忘れたような風景の中で、三人だけが、戦場からいきなりぽっかり現われた様子だと、やっと気がついたかあさんは、夜逃げでもしてきたみたいに、ふたりの息子をうながすと、足ばやに横丁をまがって、兄の別荘にむかった。

別荘も、むろん、かわらずにあった。

前の道が、すぐ切りたったがけのようになっていて、紀ノ川が静かに流れている。川の流れも、すぐ上の浅瀬の様子も、そのまた上の電車の鉄橋も、何もかもかわらないであった。ふしぎなものでも見るように、三人はしばらく別荘に背をむけて、川を眺めて立ちつくしていた……。

――こないしとると、まるで夏休みに遊びにきとるみたいやな……。

洋次郎が仏壇をおろしながら、ぽつんといった。

ん、とうなずいて、洋も、ここで遊んだ何度かの夏のことを思いおこした。浅瀬から聞こえるせせら

ぎにまじって、セミの声が聞こえてきそうな気がした。すぐにでもがけをおりて、下の川へとびこみたい気がした。大阪大空襲のあの夜がなくて、ぼくらはここへ三人で遊びにきとんのや……と思える気さえした。三人は紀ノ川を見下ろしたまま、無言でまたしばらく立ちつくしていた……。

——あんれま、まあまあまあ……。

とびあがるような声に、ふりむくと、別荘守りの沢野のじさまが立っていた。かあさんは、何もいえずに、また大粒の涙をぼろん、と一つだけこぼした。じさまの姿を見て、気がゆるんだのか、かあさんは、なかばかかえられるようにして別荘に入った。

別荘はしんとしていて、とっくにここへきていて当然なはずの伯父一家はじめ、ここを頼ってくるはずの親戚はだれ一人きていなかった。かあさんは、また心配しはじめ、気のゆるみがいっしょになって、病人みたいな顔色になってしまった。

沢野のじさまとばさまは、のろのろ静かに三人の世話をしてくれた。

——みなさんも、やんがて、おみえになるわして。心配ないわして……。

風呂をわかしてくれながら慰めてくれるばさまのことばは、けれど、どこか力がなかった。ラジオのニュースで大阪大空襲を知って半月（ふたりとも新聞が読めなかった）、もういいかげんに現われてもいいはずの親戚御一同が、だれ一人として姿をみせないことが、やはり不安なのだった。

三人が風呂からあがると、うそのようにもう夜になっていた。湯ぶねの木の香に酔い、風呂のやさしい暖かさに酔って、知らずに長いことつかっていたにちがいない。

——あがらしたら、古いもんやが寝巻きに着がえて、足のばしてゆっくり寝るんやして……。

ばさまがいってくれるのが、子守唄のように聞こえた。

——そやけど、警報がでたら、防空壕へ入らンならん。ゲートルはとれへンで。

洋次郎がさからったが、ばさまは、のんびりした口調(くちょう)で、ここには防空壕なんかないわして……といった。こんな、工場もなければ兵隊さん一人もおらん町まで、いくら敵さんでも、もったいない、爆弾おとすわけがない……というのだった。それでも洋次郎はゲートルをまきはじめ、洋もにいちゃんをまねて、ゲートルに手をかけた。すると、かあさんがいつにないきっぱりした調子で、

——ばあちゃんのいわれるようにさせてもらいまひょ。いっぺん寝巻き着て、足のばして寝とおました。警報鳴っても、起きんとすませとおました。壕へ走らんと寝とおました……。

と、くり返した。

不安と気疲れと気のゆるみで、一度に何歳も年とってみえる今晩のかあさんの顔に目をやって、洋次郎が答えた。

——よっしゃ。壕で埋もれて死ぬのよりも、ふとんの上で大の字で死ぬ方がらくやろ。洋も、そうさせてもらえ。

ん、とうなずいて、洋はゲートルを二巻きの湯葉(ゆば)のように、ていねいに枕もとにならべて立てた。

——そないたいそうに考えはらんでも、ほんまに何もないわして……。

ばさまが、笑いながらいった。

三人は何日ぶりかで、いくさがないみたいに、ゆっくりと眠った、眠った、眠りつづけた……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com